

『1842年7月8日の日蝕』：翻訳と解説

——ネイチャーライターとしてのシュティフター——

松岡 幸司

キーワード：シュティフター 日蝕 ネイチャーライティング 環境文学
エコクリティシズム

本稿では、1842年にウィーンで見た日蝕に関してシュティフター（Adalbert Stifter, 1805-1868）が書いた手記『1842年7月8日の日蝕 Die Sonnenfinsternis am 8. Juli 1842』の新訳を行う。その解説として、詳細な自然描写が特徴の一つであるシュティフターの作品をネイチャーライティングとしてとらえ、環境文学そしてエコクリティシズムの視点から評価することにより、ネイチャーライターとしてのシュティフター像を浮き彫りにする¹。

1. ネイチャーライティングとその周辺

その起源を18・19世紀にさかのぼるネイチャーライティングというジャンルは、アメリカの地において始まった。アメリカ文学におけるネイチャーライティングは、ヘンリー・デイヴィッド・ソローの『森の生活』のスタイルを伝統の一つとして発展している。それは、いわゆる自然賛美とは一線を画した散文ジャンルであり、特にソローの場合、「科学的言説と詩的語りの結合した」スタイルによって「自然と人間の関わり」を省察する「一人称形式のノンフィクション」という形式をとっている²。自然を対象にするとはいっても、対象を限りなく客観的に観察し記述する「博物誌」のようなものとは異なり、書き手「私」が、観察対象に対してどのような反応・心理・情動・思考を持ちうるか、という点を重視し、その観察主体自身も観察の対象になると言えよう。そこでは「観察対象と観察主体の相互的な関係」が焦点となり、その記述は、「自然と人間との交感的関係」を描いたものとなる。それによって、人間社会がいかにしてこの地球の現実と「実質的な関係」を結びうるかということを考えてきた、ということができよう。

環境文学というジャンルは、上記のネイチャーライティングを、エッセイという範疇から拡大したもので、ということができよう。つまり「環境と人間の関係を扱う」文芸ジャンル全般、つまり小説、詩、戯曲といったものであり、言い換えれば、ノンフィクションの枠も取り去ったものである。しかしフィクションであることは、先に述

べた「地球の現実との実質的な関係」を考えるとという点で矛盾が生じる。そこでキーワードとなるのが「場所の感覚 Sense of Place」という観点である。ネイチャーライティング、例えばソローの『森の生活』では、コンコード郊外のウォールデン池のほとりで生活した記録およびかの地で省察した事柄が書かれており、単なるノンフィクションというだけではなく、「場所の感覚」を備えたエッセイとなっている。ネイチャーライティングは、自分の生きる「場所の感覚」を求め、自己アイデンティティを「住んでいる場所」との関係で樹立しようとする。これを言い換えれば「環境への感覚」と土地とのコミュニケーションを求める文学となろう³。

文学作品を上記のようなスタンスでとらえる研究手法として 1980 年代からアメリカを中心として発展してきたのが「エコクリティシズム（環境批評）Ecocriticism」である。これは、「自然」や「環境」を中心に据えた文学研究であるが、実際には文学作品全般の環境意識や自然の位相のみならず、エコロジー（思想）の立場から文化全域に及ぶ新しいパラダイムを提示する文化批評ということができる。Garrard によれば、エコクリティシズムとは「ワーズワースからソローやディズニー、BBC の自然ドキュメントまで、あらゆる文化的生産物の領域で人間と自然の関係を想像し描くための方法を探求する」ものであるが⁴、それは Glotfelty の指摘のように「文学と土地という 2 つの足場にまたがった」ものでもあり、「人間と人間以外のものを橋渡しする理論的言説として」働くものなのである⁵。

2. 環境文学・ネイチャーライティングとシュティフター

チェコ南部のボヘミアに生まれ、チェコ・ドイツ・オーストリアにまたがるバイエルン/ボヘミアの森を愛し、そこを舞台とした作品を数多く書いたシュティフターの自然や地誌の描写は、画家であった彼の視点をふんだんに用いた細密画のようである。彼の描写は、ともすれば冗長とも言われがちであるが、それは作品の舞台の描写が、作品の内容、モチーフ、そして構成とも密接な関わりをもっているからである。

細密画のような自然描写で知られているシュティフターの描く自然は、単に作品の舞台になっている地域の地誌描写として作中に置かれているだけではなく、作品の内容、モチーフ、そして構成とも密接な関わりをもっている。

作品集『石さまざま Bunte Steine(1853)』の第 1 作「みかげ石 Granit」における詳細な地誌描写は、祖父と孫が眺める故郷（これはシュティフターの故郷でもある）の風景に時間的奥行きを持たせることで、祖父から孫への記憶の継承を媒介するものとして機能している⁶。画家でもあったシュティフターが作家となることにより、絵画という平面的な次元に空間的・時間的奥行きを持たせることに成功し、彼の描く自然に新たな意味が付与されたことを示しているだけでなく、この「記憶の継承」という行為は、故郷という土地に祖父が持っていたアイデンティティを孫へと継承する、と言い換えることができよう。

また短編『森ゆく人 Der Waldgänger(1847)』では、舞台であるシュティフターの故郷の地域について延々と続く精緻な描写によって、読者が作品世界に飲み込まれるだけ

ではなく、ボヘミアの森の大きさと、一つの生態系として閉鎖世界をなす森の姿が浮き彫りになる。この「生態系」の構造は、作品構造の複雑さとともに（物質循環を思わせる）循環性のモデルとなりつつ、ストーリー展開をも暗示している⁷。この循環性は、人間の世代を超えて続いていく生（＝木）の連鎖（物質循環）と森林の生物学的な循環を重ねることにより、人間と自然の交感的な関係を描き出しているといえる⁸。

短い指摘ではあるが、このようにシュティフターの諸作品をエコクリティカルな視点から読むことにより、19世紀半ばに描かれたボヘミアの森から、人間と自然の交感の姿をとらえることができる。特にシュティフターの作品は、単なる自然描写に終始することなく、地域（土地・場所）の空間的・時間的全体を記すことも目指している傾向があるので、さらなる研究が望まれる。

今回新たに訳出した『1842年7月8日の日蝕』には、日蝕という自然現象に対して自然科学的な解説と、それを体験したシュティフターの個人的な反応、および省察が述べられている。本文中で彼は、「あらかじめ（科学的に）この現象を知っていた」が、実際に目の当たりにした時には、「奇跡」と言い、「崇高さ⁹」を実感し、そして「神の言葉が聞こえた」かのような感覚に陥った、という体験を吐露している。これはまさに「ネイチャーライティング」そのものではないだろうか？フィクションではない自然現象を科学的見地から解説した後、自身の強烈な体験を、哲学的省察を加えながら主観的に記述する。過去に書かれた日蝕の記述に対して感じていた感覚を振り返りつつ、「この手記も大げさだと思われるだろう」と自覚しながらも、激しく震えた彼の心を追体験した読者なら「貧弱な言葉を大目に見てくださることだろう」と述べている。この拙訳を読まれる方々はどのように思われるだろうか？

1842年7月8日の日蝕

50年間知っていたけれども、51年目になってその中身の重大さと恐ろしさに驚嘆するものがある。私にとっては、ウィーンにおいて1842年7月8日の早朝のひとときに、晴れ渡る空の下で私たちが目にした皆既日食がそのようなものであった。私はこの事象を図と計算によって紙の上に、全くその通りに描くことができるし、次のようなことを知っていた。これこれの時刻に月が太陽の下に入り、月の円錐形をした影の一部を地球が横切り、月が軌道を進み地球が自転することで帯状の影を地上に引くこと、様々な場所で異なった時刻に次のように見えること、つまり、黒い円盤が太陽の中へと移動しているように見え、どンドンと太陽を隠していき、細い三日月状のものが残るだけに至り、ついには太陽が消えてしまう — 地上はますます暗くなっていき、その後再び反対側の端に三日月状の太陽が現れて太くなっていき、地上の光は、だんだんと明るい昼間のものへと増えていく — そういったこと全てを私はあらかじめ知っ

ていたし、まるで以前見た事があるかのように、皆既日食を前もってとても正確に描写できると思っていた。しかし今や本当にそれが現実になり、町の高いところにある観測所に立って、この現象を自分の目で観察したとき、目覚めている時も夢を見ている時も考えたことのない、奇跡を見た人でなければ考えることもできない全く別の出来事が起こったのだ。私の全人生の中で、これほど心揺り動かされたこと、この2分間におけるほどの戦慄と崇高さに心が打ち震えまでしたことは決してなかった—それは、まるで神が突然はつきりとした言葉を語り、それを私が理解したかのようであったのだ。私が観測所から下りてきた時、何千年も前にもしかするとモーセが燃える山から下りてきた時のように、私は混乱し、朦朧としていたのだ。

それはごく単純な出来事だった。ある物体が別の物体を照らし、照らされた物体はまた別の物体に影を投げかける：しかし、これらの物体は、私たちの通常の感覚では計ることのできない距離にあり、私たちが「大きい」というあらゆるものを超越するほどの大きさである—諸現象のそのような複合体がこの単純な事と組み合わせたり、その道徳的な力がこの物理的な過程の中へと埋め込まれ、その過程は私たちの心にとって、理解不能な奇跡の域にまで高くそそり立つのである。何百万年も昔、神は、今日この瞬間にこの奇跡が起こるようにしたのである。しかし神は、私たちの心の中に、この奇跡を感じるための琴線を与えていたのである。星々の文字を通して、何千年も後にこの奇跡が起こることを約束していたのだ。私たちの祖先はこの文字を解読する術を学び、この奇跡が現実となるにちがいないその瞬間を予告した。その子孫である私たちは、その目や望遠鏡を、予告された瞬間に太陽に向けて見る。するとどうだろう、天空の壮麗さと仕組みを計算し、学び取っていたことで、悟性はいまや勝利の凱歌をあげる—実際にこの勝利は、人間に最もふさわしい勝利の一つである—それが始まり、静かに進んでいく—しかし見よ、神は私たちの心のために、私たちが知ることもなく、悟性が理解しあらかじめ計算できたことよりも百万倍も価値のあるものを与えたのである。「私は存在している」と、神は人の心に言った—「私が存在するのは、この物体が、そしてこの現象があるからではなく。いや、むしろ、この瞬間にお前たちの心がおののきながら言い、この心が己れを、その受けた戦慄にも関わらず偉大であると感じるからこそ、私は存在するのだ。」—動物は恐れ、人間は崇めた。

私がこの手記で試みるのは、同時にあの瞬間に空を見上げていた何千という目のためにその光景を、そして同時に鼓動していた何千の心のために感じたことを、この人間の貧弱なペンが総じてなしうる限りにおいて描きなおし、記録することである。

私は5時に、町中の495番地にある家の観測台へと上がった。ここからは、町全体だけでなく、町の周囲の土地を越えて遠く、ハンガリーの山々が淡い遠景のようにかすんでいる地平線まで見渡せるのだ。太陽はすでに昇り、親しげに、煙るドナウの岸辺に、まぶしく光る流れに、でこぼことした形の町の上に、特に、まさに手が届くほどの近くで、山のガレ場から突き出す暗く静かな山のように、町から突き出して立っているシュテファン教会の上へと、光を注いでいた。不思議な気持ちで、人々は太陽を眺めていた。というのも、数分後にはとても注目すべきことがそこで起こることになっていたからだ。大きな川が流れているはるか郊外では、厚く長く伸びた霧があっ

て、南東の地平線にも霧や雲の塊が這っている。私たちは心配していた。町のほとんどの地域は靄の中でおぼろげに見えていた。太陽の方角は、ほんの薄いヴェールがかかっていて、それを通して、大きく青い島のような空が見えた。

観測器具はすでにセットされ、太陽観察のための望遠鏡も準備できていた。しかし、まだ時間にはなっていなかった。下の方では、車がガラガラと音をたて、日々の営みが始まっていた。— 上の方では、観察する人々が集まっていた。私たちの観測所は一杯になり、周りに立っている家々の天窓からはたくさんの頭がのぞいていた。屋根の棟にも人影が見られ、みんな空の同じところを見つめていた。シュテファン教会の塔の上や建築現場の足場のわずかな場所でさえ、黒山の人だかりだった。断崖の上にしばしば見られる小さなしげみのようであった。なんと多くの目がこの瞬間に周りの高みから太陽を見つめていたのだろうか。それは、何千年もの間、誰に感謝されることもなく恵みを降り注いできたのと同じ太陽だった — それが今日は、何百万もの視線の的となっているのだ — しかし今なお、すすガラスで眺めると、太陽は赤い、あるいは緑の球として、きれいに、美しく、回転しながら空に浮かんでいる。

ついに予告された時になった — ちょうど、目に見えない天使のかすかな死の接吻を受けたように — 太陽の光のうちのほんの細い帯が、このほのかな接吻で後退した。その帯と反対側は、望遠鏡の視野の中では、ほのかに、金色に燃え続けていた — 「始まった」と叫んだのは、すすガラスを持ってはいるが、肉眼で見上げていた人々だった — 「始まった」 — 手に汗を握って、いまや全ての人成り行きを見つめていた。最初の、不思議でなじみのない感覚が、心の中を走った。決して人間がたどり着いたことがない、何千何百万マイル離れたはるか彼方で、誰もその本質を知らない物体に、いまや突然、すでにはるか昔地上で人間が算出していたこの瞬間に何かが起こっている、という感覚であった。この現象は全く自然なもので、物体の運動法則で簡単に計算しうるものである、と異議を唱えないでもらいたい。神が事物に与えた、美の驚くべき魔術はそのような計算など全く関わりのないものなのだ。これは、そこに存在するから存在するものであり、計算にも関わらず存在するのだ。この魔術を感じることの出来る心は幸いである。なぜならこれのみが富であり、他の富はないからだ。すでに天空の途方もない空間には、私たちの魂を圧倒する崇高なものが宿っている。この空間は、数学では、大きい以外の何ものでもないのである。

いまやみんなが眺め、あちらこちらの望遠鏡を動かし、セットし、あれこれのことに注意している間に、見えない暗闇が、太陽の素晴らしい光の中へとますます入り込んできた — みんな待ち焦がれ、緊張が高まっていった。しかし、太陽から降り注ぐこの光の海の豊かさがとても強烈だったので、地上では光が減っているとは感じられなかった。雲は輝き続け、川の帯はきらめいていたし、鳥たちは飛び、屋根の上で楽しげに飛び回っていた。シュテファン教会の塔は、穏やかにその影を、きらめく屋根に投げかけていたし、橋を越えて車や馬が普段のようにひしめき行き来していた。彼らは、この間にも上空で生命の慰めと形容できる光が、密かに衰え去りつつあることには気づいていなかった。しかしながら町の外、カーレン山やベルヴェデーレ宮殿の向こう側では、すでに闇が、というよりもむしろ鉛色の光が、邪悪な獣のように忍び

寄ってきていた — しかしそれは錯覚だったかもしれない。私たちの観測所では、光は快く明るかったし、そばに立っている人々の頬や顔は、いつものようにはっきりと好ましかった。

奇妙だったのは、不気味で、漆黒で、ゆっくりと太陽を貪り食って、進んでいく塊が、私たちの月、美しく、優しい月、いつもは夜を、薄い銀色に照らす月である、ということだった。とは言えそれはやはり月だった。望遠鏡では、月の縁が、ぎざぎざやふくらみで覆われているように見えた。それらは、私たちに好ましげに微笑みかける円の上に突き出した恐ろしい山々だった。

ついには地上でも影響がますます顕著に見えるようになった。だんだんと、空に赤く光る鎌状のものが細くなればなるほど、川はもはや輝きを失い、琥珀織りの灰色の帯になった。弱々しい影があちこちに見られ、ツバメは落ち着きがなくなり、空の美しく優しい輝きは消えうせた。それはまるで息を吹きかけられて力なく変色したようだった。冷えた空気がおこり、私たちの方にのぼってきた。水辺は、言いようもなく不思議な、鉛のように重い光に覆われていた。森の上では光の戯れの動きが消えて、静けさが漂っていた。しかしそれは、まどろみの静けさではなく、無力さの静寂だった — 辺りにはますます青白さが注がれていき、風景はますます硬直していった — 私たちの影はうつろで空虚なものになり、顔は灰褐色になっていった。数分前にはまだ支配していた朝の爽やかさの真っ只中で、徐々に死へと向かうようなこの様は衝撃的であった。私たちは、なにか夕方のような日暮れを想像していたのだ。ただ夕焼けがないだけの。しかし、夕焼けのない日暮れがどれほど不気味なのか、想像してはいなかったのだ。それ以外にもこの日暮れは全く異質なものであった。それは、私たちの自然を、重く押さえながら薄気味悪い、見慣れぬものにしていった。南東の方には、奇妙なだいたい色の闇が広がり、山々やベルヴェデーレ宮殿でさえ、それに飲み込まれていった — 町は私たちの足もとへとますます深く、形のない影絵のように沈んでゆき、橋の上を行き来する車や人や馬は、まるで黒い鏡の中に見えるようだった — 緊張は頂点に達した — 私はなおも望遠鏡を覗いたが、それが最後だった。いまや輝く鎌状の太陽は、羽ペンをけずるナイフで闇を裂いたような細さで、刻一刻と消え去ろうとしていた。そして私が肉眼を空に上げた時、すでに他の人々もみな太陽望遠鏡から目を離し、肉眼で見上げ、眺めていた — もはや何も必要なかったのだ。なぜなら、消えかかったろうそくの芯のように、まさに太陽の最後の閃光が、恐らくは月の二つの山の間にある峡谷から後ろへと消えたのだった — それは、とてつもなく悲しい光景だった — いまや円盤の上に円盤が重なったのだ — そしてまさしくこの瞬間は、本当に心押し潰す瞬間だった — こんなことを誰も予想していなかったのだ — 全ての人の口から「ああ」という声もれた後、死の静けさがおとずれた。神が語り、人が聞き耳をたてた瞬間だった。

先ほど、自然がゆっくりと青ざめ消えていく様が私たちを押さえつけ荒涼とした気持ちにし、私たちには、それが一種死滅していくようなものだと思われたにすぎないが、いまや、空全体に突然現れた動きの、恐ろしい力強さと威力に、飛び上がるほどに驚かされ。先ほど私たちを怖がらせていた地平線の雲は、この現象をますます助長

していた。その雲は、いまや巨人のように立ち上がり、そのてっぺんからは、ぞっとするような赤い色が流れており、下の方の冷たく重い部分では、低く丸みを帯び、地平線を押さえつけていた — もう長いこと大地の一番へりの部分から湧き出ていた、変な色をした霧の塊は、いまや勢いを得て、そこにかかっている微妙で恐ろしげな輝きの中で身震いしていた — 見たことのない色が、空全体に広がっていた — 月は太陽の真ん中にあつたが、もはや黒い円盤ではなく、言ってみれば、薄いはがね色のような半分透き通った色だった。その周りには太陽の縁取りはなく、まるで、上にある太陽が光の流れを月に注ぎかけており、月がそれを割って、驚くほど美しい輝きの輪が、青く、赤く、光線を屈折させているように見えた — 私が今までに見た光の効果の中で一番優美なものであった！ — 郊外のマルヒ平原の彼方には、斜めに傾いた、長く、先のとがった光のピラミッドが恐ろしげに黄色く沸き立っており、硫黄色に輝きながらも、不自然な青色にふち取られていた。その影の向こう側は、光に照らされていたが、光は、決して、非現世的でも、それほど恐ろしくもなかった。そこから流れ出す光で、私たちはものを見ることができたのだ。ちょっと前には、単調さが私たちを荒涼とした気持ちにさせていたが、今や私たちは、力と輝きと質量に打ちひしがれていた — 私たち自身の姿は、奥行きがない、黒く、からっぽの幽霊のように身体にはりついていて、シュテファン教会は、幻影のように空中にぶらさがっており、町の他の部分は影の中であって、町のざわめきは止んでいた。橋の上では、もはや動いているものはなかった。というのも、車や馬は全て止まっており、どの目も空を見つめていたからだ — 決して、決して私は、この2分間のことは忘れないだろう — それは、巨大な物体、私たちの地球の気絶だったのだ。 — なんと神聖で、想像を絶し、恐ろしいのだろうか、この光というものは。常に私たちの周りに満ち、私たちが何も感じずに享受し、もし姿を隠し、ほんの少しの間でもなくなってしまうと、私たちの地球を、このような畏怖で慄き震わせてしまうとは。 — 空気は冷たくなり、寒くなってきた。露がおり、衣類や機材も湿ってきた — 動物たちもびっくりしていた — 恐ろしい雷雨がなんだというのだ。そんなものは、この死の静寂の荘厳さに比べれば騒がしいがらくたにすぎない — 私の頭にはバイロン卿の詩が浮かんだ。「闇」、そこには、ただ光を見るためだけに人々が家々や森に火をつける。 — しかし、この2分間の現象には、どこかに神がいるに違いないとしか思えないような、神の臨在がある、そのような崇高さがあつたと、私は言いたい。 — バイロンは、あまりにも卑小だったのだ — 突然のように、聖書のあの言葉が私の意識の中にやってきた。キリストの死の際の言葉だ。「太陽は隠れ、大地は動き、死者たちは墓の中から起き上がり、神殿の幕は上から下まで裂けた。」すべての人の心への影響も現れた。最初の驚きが静まると、賛嘆や驚愕の、はっきり言葉にならない声がおこった。ある人は両手を上げ、別の人、動揺のあまり静かに手をもんでいたし、手を取り合って握手をし合う人々もいた — ある女性は激しく泣き始め、私たちの隣の家には別の女性は気を失ってしまった。一人の誠実でしっかりした男性は後に私に、「涙があふれ出た」と言った。私はいつも、日蝕に関する昔の記述は大げさだと思っていたが、それと同じように、後世にはこの手記も大げさだと思われるのだろう。しかし、この手記のようなもの全ては、真実か

らははるかにかげ離れたものである。ただ起きたことを描くことができるに過ぎず、しかもうまくいかないのだ。感じたことはなおうまく伝えられない。しかし、空全体に広がる、色と光の、言いようもなく悲劇的な音楽は全く描くことはできない — レクイエム、そして怒りの日。それらは私たちの心を引き裂いてしまい、私たちの心は神を、そしてその死んだ聖徒たちを見て、次のように叫ばざるを得ない：「主よ、あなたの業はなんと偉大で輝かしいのでしょうか。私たちは、あなたの前では塵のようなものです。ほんのわずかな光を吹き飛ばすことで、あなたは私たちを滅ぼすことができ、私たちの世界、心地よく身をゆだねているその住処を、妖怪のあふれる全く未知の空間へと変貌させてしまうのです！」

しかし、全ての被造物にはちょうどよい節度があるように、この現象も、幸いなことにとっても短い間だけであった。いわば、神がその身体からマントをちょっと上げただけで、私たちがのぞき見て、すぐに、全てがもとのように閉じてしまうようなものだ。人々が自分の感情を言葉にし始めた、まさにその時、つまりその感情が収まり始めた時、「なんとすばらしい、なんとすごいんだ！」と叫んだ時、まさにこの瞬間にこの現象は終わった。突然あちらの世界は消えうせ、こちらの世界が再び戻ってきた。一粒の光のしずくが、白熱した金属のように上端にあふれ出て、私たちの世界が再び現れた。この光のしずくは、克服したことを太陽自身が喜んでいるかのようにほとぼしり出てきた。光線はすぐに空間を貫き、次の光線がとって代わった — しかし、最初の原子の最初の光を見て、人々が「ああ！」と叫ぶ間もなく、妖怪の世界は消え失せ、私たちの世界が戻ってきた。消える前にはとても不安に思われた灰色の光は、いまや私たちを元気づけるもの、慰め、友であり知人であった。物は再び影を投げかけている。水は輝き、木々は緑で、私たちはお互いの目を見合った — 凱歌をあげて光はどんと射していた。いかにも細く、きわめて細く、まず最初に明るい輪が現れた。まるで私たちに光の大海が贈られたかのように。— どんなに喜ばしく、どんなに克服した安堵感が心の中に生じたのか、言葉にすることはできないし、体験しない人は信じることはできないだろう。私たちは手を叩いて、これを共に見たということ、生きている限り覚えていよう、と言った — 屋根の上から通りへと人々が呼びかけるような、いろいろな音が聞こえてきた。往来やざわめきも再び始まった。動物たちさえもがそれを感じ取っていた。馬はいななき、スズメは屋根の上で、とても興奮して、いつものように甲高く、夢中になって喜びのさえずりを始めた。ツバメは、稲妻のように交差しながら、上へ下へと空中を飛び回った。光が増してきても、もはや影響はなかった。月が太陽の前から離れるのを終わりまで待っている人はほとんどいなかった。器材は取り外され、私たちは下りて行った。通りという通りや車には、家に帰るグループや列が、ひどく興奮して話をしたり、大声で叫んだりしていた。驚愕や賛嘆の波が静まる前に、そして人々が、こちらではどう、あちらではどう、とこの出来事がどのような影響を与えたかということ、友人や知人とじっくり話し合える前に、再び、素晴らしく優美で、暖かさを投げ、きらめいている光輪が、気持ちの良い空にあった。この日の営みは続けられた。— 再びその日常の仕事に戻るまで、どれくらいの間人の心は揺れ続けていたのだろうか？ 神が、この印象がずっと長いこと残るようにし

てくださいますように。その印象は素晴らしく、百年生きたとしてもわずかしか示されないものだから。私は、音楽でも文芸でも、なにかの現象や芸術によってもこのように感動させられ、打ち震えたことはなかった — もちろん私は子ども時代から、もっぱら自然のことをたくさん扱ってきた、と言ってよいだろう。そして私の心は自然の言葉に馴染んで、この言葉をよく、というよりは一面的に愛している。しかし思うに、この現象から、消えることのない印象を受けなかった心はないだろう。

しかし、この心を強烈に追感した読者のみなさんは、その模写を試みたものの、はるかに足りないこれらの貧弱な言葉を大目に見てくださることだろう。もし私がベートーヴェンであったのならこれを音楽で表現しただろうし、その方が上手くできただろう。

終わりにあたって、この注目すべき自然現象が私に残していった2つの問いを挙げることを許して頂きたい。

第1に：あらゆる自然法則は奇跡であり神の被造物であるが、その中に神の存在を認めるのは、突然の変化が生じた時、いわばその法則が乱れ、突然驚きをもって神の存在を知る時よりも少ないのはなぜだろうか？これらの法則は、神を覆っている輝かしい衣なので、私たちがそれを認めるには、神が少し衣のすそを上げなければならぬからだろうか？

第2に：光と色を同時に連続させることによって、耳に対して音がするように、目のための良い音楽を作り出すことはできないだろうか？これまで光と色は、何かをスケッチする際に関わるだけで、それらがそのまま用いられることはなかった。というのも、花火や透視画や照明は、あの光の音楽の、言ってみればあまりにも粗野な始まりに過ぎなかったからである。光の和音とメロディーの全体を通して、音と同様に、巨大なものや感動させるものを惹き起こせないだろうか？少なくとも私は、あの2分のあいだ、光と色と共に空に見えていたほど荘厳な音楽を、交響曲やオラトリオ、もしくはそのようなものと呼ぶことはできないだろう。その音楽だけがこの感銘を与えたわけではないが、それがその一部であるのは確かなことである。

注

¹ 本稿は、信州大学の共通教育において2009年度より担当している「環境文学のすすめ」の講義ノート的な意味合いも兼ね備えている。

² ネイチャーライティング、環境文学、エコクリティシズムについては、主に下記の文献を参考にした。

伊藤詔子「緑の文学批評 —エコクリティシズムとは何か」[ハロルド・フロム他（伊藤詔子他訳）「緑の文学批評 エコクリティシズム」(松柏社) 1998. 1-16 頁]

スコット・スロヴィック、野田研一「序 — エコクリティシズムの方位」[スコット・スロヴィック、野田研一編「アメリカ文学の〈自然〉を読む。ネイチャーライティングの世界へ」(ミネルヴァ書房) 1996. 1-12 頁]

野田研一「自然を感じるころろ ネイチャーライティング入門」(筑摩書房 ちくまプリマー新書 065) 2007.

³ 伊藤詔子 上掲書 11-12 頁

⁴ Garrard, Greg: *Ecocriticism*. Routledge. London and New York. 2004. (裏表紙の解説より)

-
- ⁵ Glotfelty, Cheryll: Introduction: Literary studies in an age of environmental Crisis. [Cheryll Glotfelty & Harold Fromm(edit.): The Ecological Reader. Landmarks in Literary Ecology. The University of Georgia Press. Athens, Georgia. 1996. p.xv-xxxvii.] p.xix
- ⁶ Vgl. 松岡幸司「記憶の奥行き —『みかげ石』における時間と空間—」[磯崎康太郎編『アーダルベルト・シュティフター 1805/2005 —イメージ・空間・記憶—』(日本独文学会研究叢書 043) 2006. 1-8 頁]
- ⁷ Vgl. 松岡幸司「閉鎖世界における至福の Waldgang —シュティフターの『森ゆく人』の構造と解釈—」[信州短期大学研究紀要第9巻第2号. 1997. 72-83 頁]
- ⁸ 「交感 Correspondence」とは、人間と自然との間に何らかの対応関係を見出す感覚や思考のことを指す。詳細は、上述した野田氏の著作の他に、下記も参照されたい。
野田研一「交感と表象 —ネイチャーライティングとは何か」(松柏社) 2003.
- ⁹ この手記でシュティフターの述べている「崇高さ」は、カント的な「崇高の概念」に通じている。詳細については、下記を参照。
松岡幸司「失われた光 —シュティフターの崇高な自然—」(日本独文学会「ドイツ文学」104号. 2000. 122-130 頁)

使用テキスト

Die Sonnenfinsternis am 8. Juli 1842.

Stifter, Adalbert: Die Mappe meines Urgroßvaters. Schilderungen. Briefe. Winkler Verlag, München. 1954. S.501-512.

(信州大学 全学教育機構 准教授)

2011年1月12日受理 2011年2月8日採録決定